

## 冬眠穴の前のツキノワグマ

玉谷宏夫（ピッキオ）

### 1. 背景と目的

ツキノワグマの冬眠あけについては、穴から離れる時期や日中の冬眠穴前での行動などが、電波発信器を利用した行動調査や直接観察によって明らかにされてきました。しかし、複数のクマに対して、昼夜を問わず、継続的に観察した例はほとんどありません。そこで本調査では、冬眠穴の前に無人自動カメラを設置して、クマの冬眠あけの実態把握を試みました。その結果、穴から顔を出す時期や穴を去る時期、穴の前での行動、他個体による冬眠穴訪問に関する知見が得られたので報告します。

### 2. 調査方法・場所

2011年から2017年にかけて、軽井沢町ツキノワグマ対策事業で電波発信器を装着したクマの冬眠穴を特定し、穴の前5～10mにセンサーカメラ(Bushnell Trophy Camもしくは Ltl・Acorn)を設置しました。クマが冬眠穴から移動したことを電波によって確認した後にカメラを回収し、画像を確認しました。群馬県安中市、下仁田町、長野県北佐久郡軽井沢町にかけての山林で冬眠した、のべ\*3頭のオス、のべ15頭のメスの撮影に成功しました。

※2年に渡って同一個体が撮影対象となった場合は、「のべ2頭」とした。



写真1. 冬眠した樹洞から出る親子のクマ。浅間山麓の親子グマは、新緑が広がる5月の連休頃に冬眠穴を離れる。はじめての世界におっかなびっくりの子グマたちを、母グマはやさしく誘導する。(2017年5月7日、群馬県安中市)

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 撮影された期間

3月13日から5月19日の間に撮影されました(表1)。「冬眠あけ」と言っても、穴から顔を出してその場をすぐに離れるのではなく、多くの場合はしばらくの間、穴を出たり入ったりすることがわかりました。特に子持ちのメスでは、短い個体で4日、長い個体では33日の間、継続して撮影されました。なお、最終的に冬眠穴から離れる時期はオスグマ、単独メス、子持ちメスの順番に遅い傾向にあり、従来の知見と一致していました。

表1. 対象個体が撮影された期間(2012年~2017年)

	3月		4月				5月		
	10日	20日	1日	10日	20日	1日	10日	20日	
No.82♀(単独)	■								
No.86♀(単独)				■					
No.54♀(単独)				■	■	■	■	■	
No.4♀(単独)				■	■	■	■	■	
No.82♀(単独)				■	■	■	■	■	
No.97♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.64♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.44♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.38♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.69♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.93♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.59♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.20♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.57♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.86♀(子持ち)		■	■	■	■	■	■	■	
No.66♂			■	■	■	■	■	■	
No.140♂			■	■	■	■	■	■	
No.101♂			■	■	■	■	■	■	

#### 3-2. 撮影された時間帯

単独メス、子連れメスと異なり、子グマは夜間に撮影されることが少なく、10時と17時を中心に2回のピークがありました(図1)。穴から出る時間として、暖かく、危険を察知しやすい明るい時間帯を選んでいる可能性があります。最終的に穴を去るまでのしばらくの間、子グマは相撲をとったりして過ごしており、母グマは子グマに十分な体力がつくまで待っているようです。

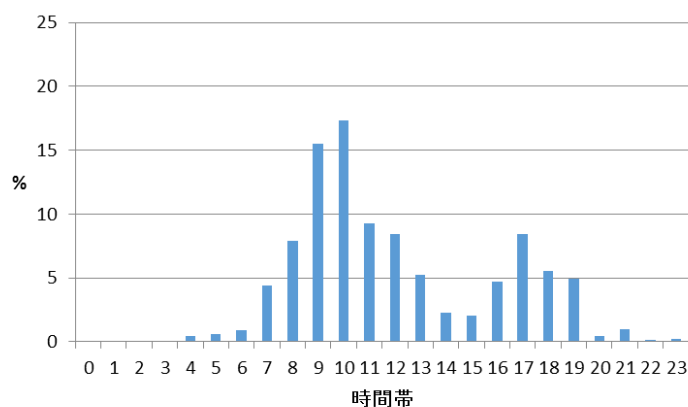


図1. 子グマ(0才)の時間帯ごとの撮影頻度

#### 3-3. 他のクマによる訪問

対象個体の冬眠中に他個体が訪れたことを、のべ8ヶ所で確認しました。8ヶ所は全てメス(6ヶ所が子連れメス、2ヶ所が単独メス)の冬眠穴であり、来訪した個体の一部は生殖器や耳タグの色からオスと判別されました。子グマがオスグマによって殺された事例が1例、穴の前から他個体が去った後に子グマが撮影されなくなった事例が2例、他個体によって冬眠穴が破壊された事例が1例確認され、オスグマによる子殺し行動は冬眠穴でも少なからず起きていることが示唆されました。